

# 中途失明者への働きかけ

中4階病棟 発表者 岩 垂 鈴 江

松 岡 明 子・赤 羽 淳 子・一之瀬 知 枝・太 田 みさ江  
木 間 けい子・北 沢 恵 子・小 林 直 子・笹 井 三 枝  
花 岡 尚 子・宮 尾 圭 子・山 本 洋 子・今 井 久 子

## はじめに

眼科領域における、リハビリテーションとは、残存している能力を再編成し、失明による、不自由さを解消する為の、社会訓練である。しかし、これらの訓練も、社会の偏見や過保護、患者自身の心理的問題などにより、必ずしも、スムーズに行われている訳ではない。この様な現状の中で、失明の宣告を受け退院して行く患者は、それぞれの家庭の中で、どの様な日常生活を送っているのだろうか。その実態を知る為に、生の体験談を聞き、今後の看護に役立てたいと考え、この研究を進めてみた。

## 研究方法

期間 昭和53年9月から昭和54年4月まで  
対象 現在社会復帰し、自立できている中途失明者……………13名  
現在盲学校の学生である中途失明者……………5名  
訓練機関へ入学できないまま、自立を目指している中途失明者……………15名  
方法 個人面接し、情報収集を行い、心理状態を中心に三段階に分け、失明から社会復帰に至るまでの援助法を考えた。

## 結果・考察

### 第一段階 視力を失いつつある不安の時期

患者は、失明に対する不安と共に、病状を知りたいという焦りの中で、医療スタッフの言動に対して、非常に敏感になっている。この時期の患者に接する時、まず、私達が考えるべき事は、安易な慰めや視力回復に期待を持たせるような不用意な働きかけは、絶対に避けなければならない、という事である。その為、医療スタッフ及び家族とのカンファレンスを十分に持ち、チーム間の意志を統一し、一貫した態度で看護に当る事が重要となる。そして、再三の働きかけに対し、反撥されても、その反撥に躊躇する事なく、ベットバス・結髪・環境整備など、日常生活の援助を通してスキンシップを持つよう心がけ、患者がひとり孤独にならないよう声をかけ、明るい話題を提供し、陰にこもらぬよう、患者に接する機会をより多く持つ事が大切である。

日常生活動作の援助においては、手で触れる、音を聞くなど、生かせる感覚を利用することに慣れるよう、徐々に指導して行く必要もある。

### 第二段階 視力回復に対する期待を失い、動揺している時期

視力回復への望みも絶たれ、将来に絶望し、死をも考える患者に接する時、どうすれば希望を持たせる事ができるのか戸惑い、私達看護婦は、何も役立たない存在ではないか、と思い込み患者に対して消極的になる事が多い。しかし、この時期にこそ患者との接触の場を多く持ち、基本的な生活習慣だけでも自分の手で成し遂げたい、という欲求を引き出し、自立を目指した起居の指導を行う事が必要である。最初は、手を引いて歩行介助しても次第に手を離し、トイレ、洗面へ行くことくらいは独りでできるよう、また、食事も膳の位置を定め、メニューを知らせれば接期できるよう指

導する。患者に同情し、はれ物に触れるような過保護的看護は、患者にとって有害であり、自立を遅らせる結果ともなりかねない。患者は、毎日の生活において失敗を繰り返しながらも、なんでもやればできる、という自信を持つようになり、次第に失明という現実を受容できて行く。そこで、気分を晴らす目的にも、さりげなく点字を紹介し、点字板に触れさせ、必要となる事を自覚し徐々に意欲が持てるよう指導して行く事も自立への励みとなる。

### 第三段階 自立を目指す時期

日常生活において、少しずつではあるがやればできる、という自信がつくとともに、自分のおかれている立場を冷静に見つめ、周囲の人々の話に耳を傾けるようになって来る。この時期になるまでは人と会う事を嫌い、ひとり苦しみ一晩中眠れず深夜放送を覚えラジオが一番の慰めであった。と誰しもが言っている。また、同じ中途失明者と会って聞いた、「自立しなくては、自分が困るんだ」という言葉でやる気になった。こんな短い言葉でも、眼の見える人に言われたら、きっと反感を持ち、素直に聞き入れる事はできなかつただろう、とも言っている。盲人にとって、どんな見ず知らずの人でも、同じ立場である盲人が語ってくれた経験談や励まし程、意欲をおこさせるものはない。そこから、初めて盲人としての知恵が教えられ、何か職業を身に就けたい、という気持ちになって来る。

失明宣告の時期については、視力回復が望めない事を入院中あるいは外来通院中に、何らかの形で知らせてくれていたら、自立が早められたのではないかと、言っている人が多かった。しかし、何も敢えて失明の宣告を受けなくても、自ら医師や看護婦の言動より悟るべきである、と話す中途失明者も居る。

以上より、失明の時期にかかわらず、誰に頼る事もなく自ら自立を目指し、社会人として生活の中に入って行くよう努力している人もいるが、高年令や周囲の無理解などにより、日常生活もままならず、不自由な生活を送っている人も多い。この様な人達に対し、何らかの社会への道を開けるよう、援助して行く必要もある。

## おわりに

私達は、今回の研究において中途失明者に接する時、過保護的看護ではなく、自立を目指した指導を行う事が必要であると感じた。そして、先輩である盲人の生活情報の提供が中途失明者にとって、大いに役立つ事、また失明宣告の時期の難しさも知った。中途失明者に会い、様々な知識、情報を得る事ができ誤った知識も訂正する事ができた様に思う。

今後、盲学校やその他の訓練所に入り、特殊訓練を受けなくても家族または友人などの協力を得て、苦しみの内より立ち上がり、努力し、盲人として社会的自立を目指している人々がいる事を考えながら私達も、リハビリテーションについて専門的知識を深め、更生指導の足がかりとなるよう、努力して行きたい。

最後に、この研究に当たり協力して下さった社会福祉事務所、盲人協会の方々に感謝し、この発表を終らせていただきます。

- 参考文献 坂出恵理子、眼科病棟一同（国立病院医療センター）；中途失明者の看護、眼科臨床医報、71 (6), 798, 1977  
原田政美；失明のリハビリテーション、看護技術、24 (8), 96-104, 1978  
原田政美、丸尾敏夫、久保田伸枝；総合的リハビリテーションと眼科学、2, 1-143, 1978